

二〇一六年 ドラマシアターども便り（札幌近郊演劇の現場から）

著者	安念 優子
雑誌名	Probe : 舞台芸術通信
号	11
ページ	47-48
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002556/

続こそが最も重要になってくる。

また演劇シーズンが常に新鮮な関心を集め、演劇を見る客層を拓げるためには、新しい参加団体、目先の変わった内容を盛り込むことも必要になってくる。その点で二〇一六―夏は、五作品中四作品を初参加の集団が担い、かつ、セリフのない人形劇や一人芝居といっ

二〇一六年 ドラマシアターども便り

今年のどもは、新年恒例のカレンダー市に続き、沖縄・三重・京都など全国から集まった社会人のブルーグラスコンサートを終え、先日、新芸能集団・乱拍子の獅子舞に来ていただき二〇一七年の幕を開けた。

昨年、代表の安念智康が「この変化の激しい時代の中でも、自分達らしい生きる場のどもを目指す」と言っていました。

生きる場所としての劇場、スペース。自分達らしいとはなんだろう…？

二〇一六年をふり返ると、東京から演劇ユニットKOTATO（主宰・芦別出身）、オーガニックシアター「レイチエルカーソン物語」（東京）・八年ぶり津軽から雪雄子舞踏ソロ・舞踏ワークショップ、滋賀県から劇団石（トル）「在日バイタルチェック」、神戸から・だるま森十えりこ「森のあるきかた311」（外輪船）、人形芝居プロジェクト☆ライオン（札幌・二五年ぶり！）、ドキュメ

た、これまでにない上演形態が登場した。二〇一七―冬には、かでの2・7の協力により高校演劇の優秀作品を演劇シーズンの一環に加えることができた。

演劇シーズンの可能性は無限、かつ前途はなかなか多難である。

江別・ドラマシアターどもIV 安念優子

ンタリー映画「final Suture」自然農が教えてくれたこと」（日・韓・米プロジェクト）、しるまるさんのアートシアター「FURUSATO」（江別）。

通奏低音としての毎年の顔ぶれ、劇団ドラマシアターども公演「未知なる遭遇館物語―おばけちゃん」（安念智康作・演出）・池田芳夫ジャズ（東京）・林家卯三郎落語（大阪）・パギヤんの歌うキネマ（大阪）、平塚研太郎アコースティックライブ、酪農大ブルーグラス新歓・追いコン、ども歳忘れ興業、多喜二祭、脱原発芸術祭…。

ギャラリーでの展示・原田ミッド―絵画教室・どもさんの演劇ワークショップ。

書きだしてみるとよくまあ、みんなで駆け抜けてきた一年。

マルシェー市場のような劇場：見世物があり、人が集まり、露天屋台・物売り。村が生まれる・目に見えない人々のネットワーク・友情が生まれ、助け合い、何かが

生まれる。つくりだす、創りだす、作りだす…！
（芝居？お店？麴？味噌？畑？こども！？）

二〇一七年。今年は九月一日〜一八日北海道演劇集団の演劇祭を、外輪船と、どもで開きます（千歳川の堤防の改修工事が開発局から発表され、外輪船は堤防に丸ごと引っかかることになりました。取り壊しか、移転かはまだ決まっていない）。

この川に沿って生まれた江別市の歴史的建造物での小さな演劇祭（釧路演劇集団・紋別うみなり・斜里みずなら・新劇場・ろう劇団舞夢・レラ・ども・出演予定）昨年から、若い世代を中心に準備を進めています。

そして現在は、九回目になる江別の多喜二祭（二月二六日）と、三月五日〜四月二日の「第七回えべつ脱原発芸術祭」の準備、真つ最中です。先日、コンカリーニョのクラウド・ファンディングの目標達成メールが届きました。二三年前のどもIVの為に四〇〇人以上の方々からのカンパを頂いたことを、想いました。

沢山のこころ、応援・励まし・叱咤を、この身体に纏い、今年も元気に創っていきます。よろしくお願いします。

PROBE 原稿依頼、感謝します。

二〇一七・一



右上 しろまるさんのおとぎよみ「夜明けの歌」（12月ども歳忘興業にて）

右下 劇団ドラマシアターども「未知なる遭遇館物語おばけちゃん」（8月）

左上 こどもたちの歌の会「うみのこ」（12月ども歳忘興業にて）

左下 劇団石（トル）「在日バイタルチェック」（9月滋賀県彦根から）